

言語地図に見る山口県の方言(その一)

岡野信子

言語地図は言語事象を符号化して、一定地域の言語共時態を図上に見せる。

この稿では、はじめに、山口県の方言状況を見ることのできる諸言語地図をあけて、簡単な解説を行う。つぎに、『日本語地図』と『瀬戸内海言語図巻』とに見られる山口県の方言状況について述べる。ただし紙数の関係上、『瀬戸内海言語図巻』に見る山口県の方言は、(その二)として次稿に予定している。

一、山口県の方言状況を見うる諸言語地図

「音韻分布図」(「音韻調査報告書」付図) 国語調査委員会編 明治38 色刷29図(未見)

「口語法分布図」(「口語法調査報告書」付図) 国語調査委員会編 明治39 色刷37図(未見)

「日本方言地図」 東条先生古稀記念会編 吉川弘文館 昭和31

第一部16図(「音韻分布図」4図と「口語法分布図」12図の複製) 第二部9図(国内方言地図5図と外国の方言地図4図)

A DIALECT—GEOGRAPHICAL STUDY OF THE JAPANESE

言語地図に見る山口県の方言(その一)

DIALECTS (『民俗学誌』) 藤原与一著 S. V. D. RESEARCH INSTITUTE 1956年

分布図17図は、西近畿・中国・四国の11府県83地点の通信調査にもとづいて作製されている。二、三の図に、山口県域の方言事象分布傾向を見よう。県内の調査地点は、本土域46地点、島嶼域6地点である。

「25死ぬ」はアクセントの図であるが、シヌとシヌルの図と見ることのできる。山口県は山陰一帯とともに、シヌルの分布域である。

「31寝ている」では、ネチヨルが中国がわでは山口県と出雲・隠岐に分布し、広島県・岡山県にもいくらかの分布が見える。また四国がわでは、高知県と愛媛県南部域とに分布している。「57飲みながら」では、ノムノムが、中国がわでは、山口県全域によく分布し、隣接する広島県と島根県石見地域にも分布している。四国がわの分布域は高知県と愛媛県南部域とである。「30あるだろうか」では、「アルローカ」の分布域が、中国がわは山口県にかぎられ、四国がわは高知県と愛媛県南部域とである。

これらの図には、山口県域が、中国地方の山陰がわ、また四国地

方の太平洋がわとともに、古態を残しがちな地域である状況が見られる。

「77足駄」では、山口県全域に、鳥取県・島根県・高知県に分布するボクリ・ブクリが広がっている。周防域にはボクリ・ブクリとともにサシハマの分布も見えるが、これは中国四国の瀬戸内海域を西進してきた事象である。この図に見られるように、山口県域は、古い方言事象をよく残しながらも、言語改新波を受けやすい瀬戸内海域から新化している。

「中国地方五県言語地図」 広戸惇著 風間書房 昭和40 分布図
433図(語彙・語法383図 アクセント50図)

この地図の調査項目は390である。いわゆる民俗語彙を多く取りあげている点に特色が見られる。調査期間は昭和30年から36年までの6年間で、話者は六十歳以上の土地はえぬきの人、主として男性である。中国五県の総調査地点は385地点(アクセント調査126地点)であるが、このうち山口県域の調査地点は、本土域は53地点、島嶼域は周防大島の2地点である。

この書の中の諸地図は、山口県域で、山陽がわ分布事象と山陰がわ分布事象とが、接触し、あるいは併存する状況をよく見せる。

たとえば「150ぼたん雪」では、岡山広島分布のボタンユキは、山口県域にも広く分布しているが、長門北部域には及んでいない。長門北部域は、山陰分布事象のダビラとボタンユキの分布する地域である。このうちボタンユキは長門全域に広く分布しているので、長門南部域は、山陰分布事象のボタンユキと山陽分布事象のボタンユキの併存する所となる。ダビラもボタンユキも周防域には広がって

いないため、この地域はもっぱらボタンユキの優勢な地域となっている。県内三分の傾向がここに見られる。

「217船の入った餅」のばあいは、山陽分布のアンピンは周防東部に分布するばかりで、周防西部域と長門域とには、山陰分布のアンモチ系事象が広く分布している。

「284祭の前夜」では、山口県全域と石見南部域とにヨドが分布し、石見北部域のヨドノヨ・ヨドノエとともに、中国域では特異である。ところで「日本国語大辞典」によれば、ヨドは九州域にかなり広く分布する事象である。中国域では特異と見える方言事象が山口県域に分布する時、九州域との関連に注意せねばならない。

「363こな」では、コンドーナが、山口県全域と山口県ぎかいの石見に分布する。後に見る『瀬戸内海言語図巻』では、広島県西辺にも分布している。九州域ではこの語をまず聞かない。手許の方言辞典などにはこの語が見えないので、全国的な分布状況をたしかめ得ないが、あるいは山口県とその周辺域だけに分布する事象であろうか。

山口県域のアクセントが中国アクセント(東京式)であることは、「50アクセント区画」に明らかである。地名アクセントや文アクセントの調査は行われていないので、「ヤマガチ」「オハヨー」「ゴダマス」式の特色あるアクセントは分布図上には見えない。

「日本語地図」 国立国語研究所編 第1集・第6集 昭和42
昭和50 色刷分布図300図 各集に解説書がある。

調査は昭和32年から40年までの8年間に、65名の調査者によって行われた。調査地点は北海道から沖縄まで240地点で、被調査者は原則として明治36年以前に出生した男子である。本地図作製の目的

は、

(1) 現代日本標準語の基盤とその成立過程

(2) 日本語の地理的差異の成立と、各種方言形の歴史
の2点を明らかにしようとするものである。(「日本語地図解説
—方法—1頁) この目的の下に、調査語288は、多く日常基本語の
中から選ばれている。

この地図に見られる山口県の方言の状況については後に述べる。

山口県内の調査地点は、本土域48地点、島嶼域11地点である。

「瀬戸内海言語図巻」 藤原与一著 東京大学出版会 上下2巻

昭和49

上巻は音声項目18、文法項目102について、老年層図と少年層図、
各々122図である。下巻は語彙項目121の図で、老・少ともに122図であ
る。

調査地点は全有人島128の総集落70地点、沿岸域141地点で、このう
ち、山口県の調査地点は、島嶼域102地点、沿岸域は19地点である。

調査は60歳代の女性と中学2年の少女とを被調査者として、昭和35
年から5か年をかけて、24名の調査員によって行われた。

本図巻では、島嶼域の調査地点が密であって、一大内海多島海域
における方言伝播の実態と理とを読むことができる。また地図一葉
に老年層図と少年層図とが上下に並んでいるので、動態としての瀬
戸内海域方言を考察することが容易である。本図巻の読解のため
は、「瀬戸内海域方言の方言地理学的研究」(藤原与一著 東京大
学出版会 昭和51)がある。

本図巻に見る山口県の方言については、次稿で述べる。

言語地図に見る山口県の方言(その一)

「関門海峡周辺方言地図」 宮本登著 昭和50 分布図164図

調査地点は下関市と北九州市の186地点で、話者は五十歳以上、男
女を問わない。調査項目85の大部分は「日本語地図」の調査項目
と一致させてある。重要な地域の精細な調査である。

「99区画概略図」には、関門海峡が、下関市の方言と北九州市
の方言とを隔てている状況が見える。しかし著者はまた「関門海峡
は、言語を伝える道である」(26頁)とも言う。

「山口福岡両県接境地域言語地図集」 梅光女学院大学日本文学
会

方言研究ゼミナール 岡野信子編 昭和51 分布図210図(老年層
図少年層図各105図—音声7図・表現法38図・語詞60図)

調査・作図ともに、昭和50年度に16名の学生と岡野とが行った。

調査地点は、山口県がわは下関市と両傍の厚狭郡・豊浦郡の23地点、
福岡県がわは北九州市と京都郡・遠賀郡の20地点である。(以下、
下関がわ・北九州がわと言う。)

下関がわの老年層図では「11行かせる」に見えるイカスル(使役
助動詞の下二段活用)の残存や、ゴト(如)の使用(15・16・17)
に、北九州域の分布状況との近さが見られる。「12可能A」のイキ
エル(行くことができる)や、「13可能B」のナリエン(なること
ができる)は、下関がわに見えて北九州がわには見えない。た
だし長崎などでは、これと同類または同一のイキユッやナリエンを聞
く。

下関がわの老年層から少年層への推移状況を見ると、まず音声面
では共通語化が顕著である。単純化の傾向も見られる。たとえば
「94ごぼうそぐ」では、老年層図では下関がわのはほぼ全地点に分

布したフクが、少年層図では一地点に残るばかりで、ケズルがこれに代っている。鉛筆でも木片でもごぼうでも、すべて「ケズル」でかたづけられる純化がここに認められる。

「67努力交換」では、老年層図で優勢であったイーもテマガエも、少年層図にはまったく見えない。生活状況の変化が、語詞を埋没させたのであろう。ところで「90寄り掛かる」では、老・少図はほぼ同じで、ともにスガルである。日常に頻用される語は移りにくいのであろうか。老年層から少年層への推移状況は、このように語ごとに異なるが、そこにはそれぞれに推移の理が通っている。

関門海峡は、海峡をはさむ両域のことを、ときに隔て、ときに運んでいる。「83卵一箇」のイッキ、「69いたずらっ子」のドーゲンポーズなどは、下関がわにのみあって、北九州がわには見えない。

下関がわから北九州がわへ分布が広がるばあいは、企救半島突端の北九州市門司に、さらにはその背後の豊前域一帯に広がることが多い。北九州がわの分布域がさらに広がって、豊前・筑前両域にわたることもあり、語によっては筑前域だけに分布域を広げているものもある。

また北九州がわから下関がわへと伝播する事象もある。「13可能B」のナリキラン（なることができる）、「23出ない」のデラン、「22起きる・起きない」のオキラン、「28元気だった」のゲンキヤツタは、北九州から下関がわへ移ったらしく、少年層図で下関がわの分布が広がっている。

両域の老年層から少年層への推移状況を比較してみると、下関が

わのほうが、推移のテンポがいくらかゆるやかなようである。北九州ほどに都市化が進んでいないためであろう。「6悪い」「28元気だった」「57毒蛇」「85寄附金を集める」「89戸をしめる」「92だだをこねる」「95・96シロシー」の少年層図が、その傾向を見せている。また下関がわのうちでは、瀬戸内海がわより響灘がわに、新化がいちだんとゆるやかである。たとえば助動詞ゴト(15・16・17)、ナリエンになることができない(13可能B)、「ハーソレカネ」(40あいづちことば)、ベッコ(56仔牛)、グージ・タユサン(62神官)、ゴンゴチ(70ばけもの)、アンバイ(74体のぐあい)、ツズ・ツド(77つば)などの事象が少年層図にも残存しているのは、響灘がわである。

老年層図から少年層図への推移状況を比較することは、動態と動態との比較にほかならない。両域の方言状態の将来が、そこに示唆されているようか。

「山口県民俗地図」 山口県文化財愛護協会 昭和51 分布図80図
調査地点は本土域123地点、島嶼域27地点

いろり・かまど・雨具・田下駄・潟田・稻架・田植えの組・釣漁・分家・二月一日などの名称の分布状況が見られる。

「表現法の全国的調査研究」準備調査の結果による分布の概観
究所 昭和54 分布図60図

山口県の調査地点は、美祢市大嶺町・佐波郡徳地町・玖珂郡美和町の3地点である。「6たぶん起きるだろう」の助動詞ロー(らむ)や、「31花が散っている」の結果態(「の Chol ことばは、さきに見た

A DIALECT-GEOGRAPHICAL STUDY OF THE JAPA-

NESE DIALECT では、中・四国外周域の分布事象であった。今この書の分布図を見ると、それらは九州域にも分布している事象であることがわかる。助動詞ローは、新潟県北半にも分布している。

また「10早くする」のセルや「52雨が降っているから行くのはやめろ」のカラの山口県分布が、西日本では異色のものであることも、この書の分布図の中に明らかである。

山口県域の方言状況を見せる言語地図で、筆者の見得たものは、以上のおりである。なお未刊であるが、「山口県錦川流域言語地図」100図がある。昭和42年度と44年度に、藤原与一先生の指導を受けて、広島大学大学院生が調査・作図したものである。この言語地図については、藤原先生のご論文「山口県錦川流域方言状態の方言地理学的研究」（『国語国文学誌』第六号）がある。

二、「日本語地図」に見る山口県の方言

「日本語地図」上の山口県は、中国域を内包する方言諸分派の域にあるが、ときに中国域を離れて九州域と一体化する。また、中国分布事象と九州分布事象とは、山口県下で混交して、混交事象がここに分布することもある。また近畿以東に分布する事象が、近畿以西では山口県にのみ分布することもある。

以下にこれらを順次とりあげ、つづいて県内の分派状況を見る。

1 他域との関連状況

(1) 中国域を内包する方言諸分派内におさまる傾向

言語地図に見る山口県の方言（その一）

「日本語地図」に見る山口県の方言は、西日本方言諸分派の中にあつて、中国・近畿・四国・九州の方言と、さまざまの連なり様を見せている。一、二の例図をとりあげてみよう。

山口県に分布する「明るい」の意味のアカイ（29図）やオル（居る）53図）は、西日本一帯に分布している事象である。

「212ふくろう（梟）」では、山口県にはフルツクがかなり広域に分布しているが、この事象は、南畿・西中国・四国に分布する。「111まゆげ（眉毛）」のマヒゲも、南畿・中国・四国分布である。「24ほそい（細い）」のコマイ、「66かつぐ（材木を担ぐ）」のカタゲ、「139ひまご（曾孫）」のヒユーマゴ、「265きのこ（茸・蕈）」のナバは、中国・四国・九州分布である。「77びっくりする（驚く）」のタマゲルは、西中国・西四国分布である。中国地方を分布主域とするキーナ（27黄色い）、スクモ（171もみながら）粗穀）、キンカイモ（175じゃがいも）馬鈴薯—その2）は、山口県にも広く密に分布している。

このように、山口県域が中国域を内包する方言諸分派の内にあるのは、自然な分布傾向である。

ところで山口県域の方言事象分布相は、しばしば中国域よりは九州域への近さを見せがちである。

(2) 中国域を離れて、九州域と一体になりがちな傾向

すでに見てきたように、中国・四国・九州には同じ方言事象が分布しがちであるが、山口県だけが九州と一体化する図も多い。

「159まわた（真綿）」では、図1に見るように、山口県下と九州東北域とはネバ、九州西南域はネバシである。山口県以外の中国域

イリコ・イコが分布し、沖繩諸島にはイリキ・イリチ・イッキ・イキーなどが分布している。

山口県分布のキーを、イキーなどが語頭の狭母音を落した語形と考えることが許されようか。とすればこの図も、山口県域と九州域との方言事象分布上の関連の深さを示す図と見ることが出来る。

(3) 山陽分布事象と山陰分布事象とが、ともに分布する傾向

この傾向が山口県域に見られることについては、『中国地方五県言語地図』のいくつかの図をとりあげて述べた。『日本語地図』においてもこの傾向が見られる。

「127しもやけ(凍傷)」では、広島県から瀬戸内海を西進したカンバレが、周防域の瀬戸内海がわに分布している。一方、日本海がわと周防北部にはユキヤケが分布しているが、これは東北地方から山口県まで、長大な分布域を持つ事象である。

「259にじ(虹)」では、県の中部以北にミョージの分布が見える。

このミョージも能登半島から九州北部まで、どちらかといえは日本海がわに分布のたどれる事象である。南紀・高知の分布ともあわせ見れば、山陰分布事象というよりは、周辺域分布事象と言うべきであらう。

「212ふくろう(梟)」では、山陽がわを西進してきたフルツクが、山口県域にも広く分布しているが、長門北隅には及んでいない。長門北隅に分布しているのは、島根県分布のヨースクである。

いったいに、山陽分布事象と山陰分布事象とは、山口県域においては、山陽分布事象のほうが優勢である。山陽道と瀬戸内海の道とは、山陰道と日本海の道よりは、より活潑な言語伝播路であつ

た。ところで山口県域に見える山陰分布事象は、『日本語地図』と『中国地方五県言語地図』とでは、後者のほうにより多く認められる。調査語の選びかたによるのであろうか。

(4) 近畿以西における残存分布

「17大きい」「20太い」「21あらい(粗い)」を見ると、山口県中部域から石見南部域にかけてイカイが分布している。図上、イカイは滋賀県・福井県以東に分布していて、近畿以西の分布は、山口県と石見南部域だけである。『日本語地図解説―各図の説明―』には、「古くはイカイ類が連続した領域を持っていたのではないかと考えられる。」とある。また『日本国語大辞典』も、近畿以西の諸地の方言集に、「大きい」「多い」「はなはだ」などの意でイカイがあがっていることを記している。山口県域にイカイがかなりよく残っているのは、人々の好みによるのであろうか。

「197いど(井戸)」では、イケが山口県西南域(長門南部域)と北陸・滋賀県によく分布し、福島・奈良・京都・兵庫・福岡の諸府県にも点在する。この分布状況もまた、山口県域が、衰退途上の事象をよく残す一例となっている。

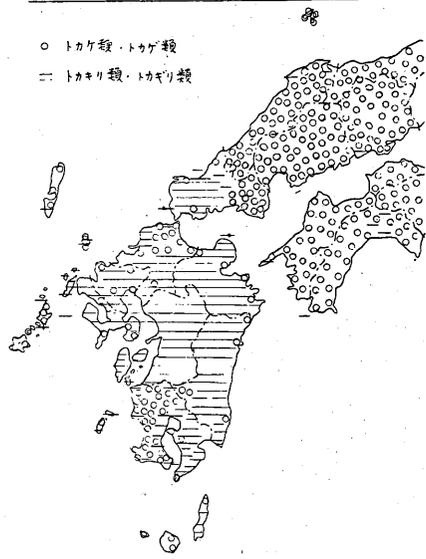
2 県内の事象分布傾向

山口県域の方言事象分布相を見ると、県内が一体化する傾向とともに、東(周防域)と西(長門域)とに分かれる傾向も顕著である。また、東・西・北(長門北部)に分かれる傾向も見える。

(1) 県内が一体化する傾向

県内の方言分布状況がほぼ一様である図は、これまでに見たもの

2 とかげ トカゲ(ケ)類とトカキ(キ)類



の中にも多かった。ここにあげられることは省略する。

(2) 県内が東西に分かれる傾向

方言事象の分布状況が、東の周防域と西の長門域とでは異なる図もかなり多い。

「22とかげ(蜥蜴)」(図2)では、西部域(長門域と周防西辺)には九州と同様にトカキリが分布し、東部域には近畿・中国分布のトカゲが分布している。(出雲と四国南半、および九州は東北域を除く大部分の地域が、ゲ・ギと濁音である。)

「161せともの(陶磁器)」のばあいは、西の分布事象は九州の広域に分布するヤキモノ(焼物)類である。東にはヤキモノもいくら

か見えるが、おもな分布事象はカラツモノ類で、これは山口県東部域と、中国・四国・九州東辺とに分布している。「176さつまいも(甘藷)」[21もぐら(土竜)]「23蜘蛛の巣」でも、東が中国、あるいは中国・四国に連なり、西が九州に連なる分布状況が見える。

「182とうもろこし(玉蜀黍)」を見ると、東部域分布事象はナンマン・マンマン類で、これらは近畿・中国分布のナンバン(南蛮)系事象である。一方、西部域には、四国・九州分布のトーキビ(唐黍)が分布している。さきあげたものでは、四国は山口県東部域と同一事象を分布させることが多かったが、この図では、九州とも山口県西部域と一体化している。山口県域と四国とのかかわりようが単純でないのは、本土域と四国・九州との言語路が多様なためであろう。

ところで山口県域が東西に分かれる分布傾向を指摘できるとはいえ、東と西との分布域の広さは、事象ごとにさまざまである。西部域分布とは言いながら、トーキビの分布域はかなり狭い。このほか「51坐る」のヒザマズク、「178里芋」その2の「カイモノ」などの西部域分布事象の分布域も狭い。東からの改新波の西進の勢が強い時、西がわ分布事象はしだいに後退するのである。

「117舌」では、豊浦郡・厚狭郡にツバのまとまった分布が見えている。ツバは、図上、この地域以外には、長崎県の一地に見えるばかりである。沖縄島嶼にはスバ・シバ類が広く分布しているが、ツバはこれらと関係の深い事象ではあるまいか。

いったいに豊浦郡の方言の異色の指摘されることが多いが、これは、言語改新波が届きにくく、九州とのかかわりの深さを今日も見

せているためであろう。

東西の分布相の異なる図の中には、東が山陽的で西が山陰的である図も見える。たとえば「144たけうま(竹馬)」では、東部域には近畿・中国・九州東部域分布のタケウマが分布している。一方、西部域には、中国山地から山陰にかけて分布するタカアシ系事象が分布している。

このほか、東部域には中国、あるいは中国・四国分布事象が広がり、西部域には近畿分布事象の広がる図もある。「24つくし(土筆)」もその一例で、東には中国分布のヒガンボズと、中西国分布のホーシから出たらしいホーシヤとが分布する。一方、西がわ分布事象のツクツクホーシ類は、近畿域に広く分布する事象である。

「97こおる(手拭が凍る)」では、東部域には中国分布事象のシミルが分布し、西部域にはシミルとコゴルが併存している。コゴルはシミルの後に近畿域から西進してきた事象のようで、山陽がわにはかなりよく分布しているが、なぜか周防域には分布が見えない。このほか、「68かつぐ(二人で担ぐ)」「25かみなり(雷)」にも、東部域は改新波を受容しにくく、西部域は受容しやす傾向が見られる。オドロクを々目覚める々意味で使うのが東部域、使わないのが西部域であることを見せた「79図」も、東の古さ、西の新しさを見せる図である。

ともあれ、これまでにとりあげた図では、東部域は中国分布事象の分布する地域であったが、西が中国色、東は四国色といった図もいくらかある。「102つむじ(旋毛)」で、西には中国・九州分布のギリ類が分布し、東には四国分布のマイマイ類が分布するのは、その

言語地図に見る山口県の方言(その一)

一例である。

諸図の中には、東にも西にも、中国域には見えない事象の分布するものもある。「103すりこぎ(搗粉木)」がそれで、東には四国・九州東北域と同様にレンギ(ギ)が広がり、西には近畿分布のレンゲ(ゲ)が広がっている。(広島・岡山はデンギである。)

このほか「80あぎ(痣)になる」「203めうま(牝馬)」「209こうし(子牛)」「211もぐら(土鼈)」「235くものいと(蜘蛛の糸)」「242どくだみ(蕺菜)」「299ほうほう(梟の鳴き声)―その2」などにも、東西に分かれる分布相が見える。ただしこれらの図では、他域とのかかわりは単純には言いがたい。

「54片足跳びをする―前部分」では、リンリン類が西がわにかなり広く分布しているが、これは山口県にしか分布の見えない事象である。

(3) 県内が東・西・北に分かれる傾向

県内の分布状況が東と西と長門北隅に分かれる図もある。

「236・237・238かたつむり(蝸牛)」(図3)のばあい、県内に広く分布しているのはカタツムリであるが、東にはもつとも新しいデンデンムシも分布している。デンデンムシは西部域にまでは及ばず、ここはカタツムリとマイマイ類の分布するところである。そして長門北隅にはもつとも古いナメクジ類の分布が見えている。

「34きなくさい―前部分」では、東はボロクサイで広島県分布に続いている。西はヤークサイであるが、これは安芸・周防の非分布域をはさんで、近畿・岡山県・備後の内海域、そして長門に見えている事象である。一方、長門北隅は、石見と東九州、西四国に分布

たと思える。

「127しもやけ(凍傷)」のカンヤケは、山口県にはかなり広く分布していて、その周囲には内海域事象のカンバレと、日本海域事象のユキヤケとがある。カンヤケは、カンバレとユキヤケとの接する地域に醸成された混交事象である。

中国域事象と九州域事象との混交事象、また内海域事象と日本海域事象との混交事象が、山口県域に醸成されることは自然である。

「219ひきがえる」では、長門域東南端にワクドピキが見える。これは九州域分布のワクドと中国域分布のヒキとの合成事象である。

「242どくだみ(蕨菜)」では、周防東部域にジョ(一)ローグサが分布している。ジョ(一)ローグサをかこんで広く分布しているのは、ジュヤクとニュードローグサである。「入道」に触発された「女郎」の発想を、ジュヤクに比較的近い語形に託したのがジョ(一)ローグサではあるまいか。

「208めうし(牝牛)」では、山口県全域と石見南部域とにウナミが分布している。山口県以外の中国域にはオナミが広がっていて、大分県域はウナメである。山口県分布のウナミは、オナミとウナメとの混濁事象であろうか、あるいはオナミの語頭母音を転じたものであろうか。

混濁事象かと思えるものは、このほかにも多い。新旧事象の併用されることの多い地域に、また異なる伝播路を進んできた事象が接し衝突する地域に、混交事象は醸成されやすいであろう。

4 外来語受容

言語地図に見る山口県の方言(その一)

「143たこ(瓶)」の図では、山口広島両県全域にヨーズが広がっている。この事象については、岩国市の山崎武夫氏から、中国語のヤンツ(揚子)を出自とする語であろうとご教示をいただいた。氏は昭和19年ごろ、上海近郊の農村に在任しておられ、少年たちが瓶をヤンツと呼ぶのを耳にされたそうである。長崎にはヨーチュー類の分布が見える。ともに中国語を受容したものであろうが、長崎と山口に別々に伝わったものか、あるいはヨーチューとヨーズとの間に伝播関係が認められるものか、明らかでない。

なお、「日本語地図」には見ることができないが、山口県の日本海沿岸島嶼域には、朝鮮語のチングー(親父)も広く分布している。チングーは九州西南域から日本海がわの沿岸島嶼を伝って、隠岐に届いている事象である。(島根県では語形が変化している。)

山口県の日本海がわは、九州西部の沿岸島嶼域とともに、中国語朝鮮語を受容しやすい位置にあった。

山口県域の方言状況を、はじめに諸言語地図の上に簡略に見て、つづいて「日本語地図」上にややくわしく見てきた。

山口県の方言状況を一口で言えば、古い方言事象の衰退も、新しい方言事象の伝播も、本土域内では比較的緩やかな地域と言うことができようか。西辺に位置するためである。それゆえに周辺域分布事象を残しがちである。

またこの地域への言語路がさまざままで、それぞれ伝播のスピードの異なることも、山口県の方言状況を多様なものにしていく。さきに指摘した九州・四国とのさまざまのかかわりようや、県内の二

分、あるいは三分の傾向がここにもたらされている。

九州域との関係では、山口県の日本海がわと九州西部域の沿岸島嶼との漁業上での交渉がかなりあったことも、念頭に置くべきであろう。

長門内海域が、ときに周防域よりも新事象受容の早さを見せるのは、北前船寄港地の下関がここにあるためであろうか。

混交事象の醸成という注目すべき傾向は、その地理的位置から、新旧事象・異事象の接触の多いためにもたらされたのであろうが、山口県域に生きる生活者たちの言語造出力、あるいは言語の好みといったものも、ここに見ることができる。

次稿では、『瀬戸内海言語図巻』の老年層図と少年層図とを比較して、山口県方言動態を見る。

- 1 地図は、『日本語地図』159・224・236 237 238・88の略図である。
- 2 まわた（真綿）の作図については、住田幾子姉の御助力をいただいた。感謝申しあげる。

訂正

- ① 図1の凡例上の介（キヌワタ類）は↑と訂正してください。
- ② 図4でコッルをあらわす斜線が周防域に薄くなっています。これは山口県全域にあるものです。